

## 小児(乳幼児)の喘息(ぜんそく)について

今月は冬季オリンピックがトリノ(イタリア)で開かれます。注目は何と言っても女子フィギュアスケートですが、1秒の100分の1を争うスピードスケートの迫力も見逃せません。スピードスケートと言ったら清水宏保(しみずひろやす)選手を思い出すでしょう。あの小さい身体(162cm)・短い足で大柄の外国選手より速く走るのですから、そこまでのレベルに到達するには並大抵の努力ではなかったと想像できます。

その清水選手が喘息持ちである事はあまり知られていません。子供の頃は身体が弱く、よく風邪を引きゼーゼーしていたという事です。スピードスケートが肺を鍛え、喘息を治すのいいと聞いて小学校の時に始めました。ただ家族の方針で、喘息の薬は強いからという理由で、かなり苦しくなるまで治療せず、時に入院するまで重症化していたという事です。

その事があって大学時代には、身体の仕組みに興味を持ち、解剖学を勉強し、喘息や持病の腰痛の原因を理解していったようです。その頃から「発作は止める」のではなく、「発作を出さない」方針でステロイド吸入治療を始めました。そのおかげで現在ではほとんど発作は予防され、激しいトレーニングにも耐えることが出来ています。

さて、乳幼児には風邪を引くとヒューヒュー、ゼコゼコする子が多く見うけられます。気管支が細く狭いので痰が引っかかり易いのが原因です。そのような状態で病院に行きますと、「気管支喘息」とか「小児喘息」ですと迷いもなく診断する先生もいれば、喘息になる一歩手前の「喘息様(性)気管支炎」という慎重な先

生もいると思います。

お母様方には「ぜ・ん・そ・く」という病名が、いかにも重症で呼吸困難を起こす病気というイメージがあるようで、喘息とは決して言われたくないと、もろに顔で拒否反応を表現する人もいます。でも診断名が「喘息」であっても軽症から重症までありますので、軽症のうちに早く治療をした方が得策と思います。

最近、**ステロイド吸入薬が普及**しつつありますが、以前から小児への使用は成長を抑えるという懸念から、成人ほど普及していませんでした。しかし、**小児においても、ゼーゼー発作を繰り返すと気管支が傷み易くなり、内腔(ないくう)が次第に狭く・硬くなる事が言われています。**従って、**気管支拡張剤**などで治療していてもゼーゼー発作が月に1~2回ほどある患児は、ステロイド吸入薬を考慮した方がいいという早期治療の方針になってきています。懸念される成長抑制においても、極微量の決まった薬用量であればなんら問題はないと報告され、欧米では小児においても頻用されています。

「ゼーゼー、ゼコゼコを止める」のではなく、「ゼーゼー、ゼコゼコを起こさない」治療方針として、ステロイド吸入治療が今後の小児(乳幼児)喘息治療における選択肢の一つとして普及していくものだと思います。(たまなは)

